哲學研究　第三十四號　第四卷第一冊

ソフィストとソクラテス

（京都哲學會講演）

波多野精一

有名なる史家 Eduard Meyer はかく言つた。「希臘人は人間の活動のあらゆる領分に於て偉大なる業をなしたに相違ないが、人類の歴史に於て其の占める双びなき位置は、終極は、ソクラテスにもとづく」と。この言は幾分誇張を免れないが、近世の歐羅巴の文化が小ならざる程度に於てギリシア文化の基礎の上に立ち、而してギリシア人の精神的に産出したものゝうちで最も偉大なるもの最も恒久的の影響を及ぼしたものが其の哲學であるを思つたならば、ソクラテスの歴史的位置は決して輕く評價し得ないのである。西洋文化の勢力の及ぶ限りに於て、ギリシア人は今日もなほ人類の教師であり、而して希臘人に對して哲學を其の精神的指導者の位置に高めた

のはソクラテスである。

これは明白なる、大體に於て何人も異議なき、事實であるが、いかなる活動いかなる業績によつてソクラテスはかくの如き歴史的位置を贏ち得たか、彼の人格及び事業の本質と意義とは何に存するか、――この問題は、或意味に於てすでに彼の弟子等の間に起り、且つ盛に、はげしく、論議された問題であつて、今日も學者間に極めて多くの異說を産み出しつゝある問題である。しかも、考へ得られる殆ど凡ての答はすでに何人かによつて試みられ、全く新しき見解を提供せんことは不可能といつて差支ない。吾々のなし得ることは、他の人々のすでに觀察した事實、すでに發見した眞理、を幾分異つた觀察點より、幾分異つた光に照して、見ることに由て、幾分鮮かに見る以上には多く出ないのである。吾々が今ソフィストとソクラテスとに就て論ずるのも、畢竟は、殆んど時を同うして働き、等しく時代の代表者として甚だ深き印象を時人に與へ、又幾多共通の點を有した人々と、比較し關係せしめることによつて、ソクラテスの精神と本質とを、從つて彼の歴史的位置を、了解せむ爲めに外ならぬ。さて、この問題に關する研究材料についても種々の議論はあるが、吾々はそれを主としてプラトンに求めようと思ふ。プラトンはソクラテスの本質を最も深く解し其の事業を最も

正しく傳へた弟子であり、又彼の著述はソクラテスの影響が後の世に及んだ最も廣き自由なる通路であつた。普通最も忠實なる記錄として尊重されるクセノフォンのソクラテス言行錄の如きは殆んど全く取るに足らぬ。それは、ソクラテスの人格及事業を辯護し鼓吹せむとする一種の傳道書であつた點に於てプラトンの對話篇と何の異る所もない。たゞ異るは、其の著者がプラトンの如く師の精神に共鳴する了解なく、其の遺業の遂行に一切をさゞける熱誠を缺いたことである。

先づソフィストより始めよう。彼等の活動の特質及び目的如何。蓋し彼等程後世に誤解され曲解されたものは少い。幸にGroteの不朽の名著が彼等の研究に於て一新時期を劃して以來、彼等を、詭辯を弄しつゝ學問や道德の基礎を破壞する極めて危險なる人物であるかの如く解する古來の謬見は大體に於て一掃し去られた。彼等は當時のギリシア、殊にアテンの社會的文化的要求、――讀み書と體育との以上に出でなかつた在來の教育には最早滿足し得ずして、自由なる市民としてふさはしく、又政治的公共的生活には必要なる教養を得むとする要求、に應じて現はれた、教師又は教育者、グロートの語を用ゐれば、"Professors or Public Teachers,,である。彼等の任務とし

た所は第一に「よき」市民たるに必要なる學藝を教授するに存した。彼等の取扱つた科目は各自の能力及趣味に應じて可なり範圍及び內容を異にしたが、彼等の凡てに共通であり、又最も重要なる中心的意義を有したものは修辭能辯の術 Rhetorik であつた。かゝる學藝の教授に次で最も重要なる彼等の任務は德、卽ちよき市民として有せねばならぬ道德的資格の養成であつた。彼等は醫師其他一定の技術を職業とする人々と同くわが勞力に對して謝金を要求した。要するに、彼等は皆學藝及德の教授を職業とする實際家であつて、純なる學問の研究に身を献げる學者、又は一定の教や主義によつて動き相結ぶ思想家の團體例へば哲學の一學派の如きものではなかつた。此點は吾々がグロートより學び得た最も重要なる眞理の一である。さてこゝに起る問題は、彼等に共通の點は、グロートの考へたやうに、單に職業のみに限られたかであるが、この問題に關しては吾々は遺憾ながら彼に同意し得ないのである。共通の職業は共通の考へ方、評價の仕方を生んだばかりでなく、後に論ずるやうに、ソフィストのうち一人は明なる自覺を以てこの共通なる精神的傾向を思想の形に言顯はした。吾々は今少しく立入つてその共通の傾向を考察しよう。

第一。ソフィストの目的はよき市民卽ち實際生活殊に政治の世界に於て有力有爲

の人才を養成するに存した。換言すれば彼等の教授した學藝は手段であつて目的ではなかつた。學藝の教師としての彼等は勢ひ內容其ものゝ本質的價値には無頓着たらざるを得なかつた。彼等の第一の關心事は內容の眞なるや否やではなく、實際生活に役立つや否やであつた。かゝる氣風のもとに、眞理に對する確信や尊敬の態度の成立ち得ないはいふまでもない。何が眞であるかは各人の見る所に任かせて差支ないといふことになる。實用主義方便主義は相對主義 Relativismus の發生に最も適した地盤である。

第二。この傾向を甚しく助勢したものは、ソフィストの教授した最も重要の學科が能辯術に存したことである。能辯術は、其の本質上、內容には無頓着なる、形式的の學藝である。其の目的は、なにを語り論ぜむかよりは、むしろいかに語り論ぜむか、を示し教へるに存する。事實として、ソフィストの活動した實際世界に於ては、國民議會に於ても裁判所に於ても市場に於ても、常にあらゆる問題について相異る乃至相反する意見が闘はされて居た。實際家の立場より見れば、ソフィストの一人プロタゴラス (Protagoras) のいつた通り、如何なる事柄についても二つの相反する論は可能であるといはねばならぬ。しかも能辯術は其等のいづれが眞なるかを定め又教へるもの

ではない。內容の如何に拘らず、人にすぐれて巧みに、美しく、有效に、論ずるを得しめるもの、プロタゴラスの語を用ゐれば、弱き論を轉じて强き論となすものに外ならぬ。簡單にいへば、能辯術從つてソフィストの活動の根柢に潛在した精神的傾向は相對主義である。尤もこの相對主義は普通の懷疑論とは趣を異にし、眞理を得むとする努力の失敗より生じた絕望的態度でもなく、又凡ての認識凡ての學問の不可能乃至無價値を示さむとする破壞的態度でもなく、眞理や認識に對して興味を覺えぬ實際家の態度、――經浮又は虛榮には陷り易いが、兎に角わが力の自覺を背景とした、活氣に滿ちた、樂觀的なる相對主義であつた。しかも、相對主義であつたことには變りがない。

第三。德の敎師としてのソフィストの態度も、今まで論じ來つた彼等の精神的傾向と關聯してはじめて解し得られると思ふ。普通行はれる說によれば、ソフィストは國家的社會的生活の基礎を奪ひ去る、危險なる個人主義の主唱者であつたといはれる。而してプラトンが其の對話篇 Gorgias に於て Kallikles の說として叙述した所のもの――卽ち、個人の欲求と其を充たし得る力とが價値の最高標準であり、從つて弱者は强者の利益と享樂との犧牲たるに甘んずべきである、自然に從へば强者の力卽ち正

義であり、之に反して社會的共同生活の規範はすべて單に人爲に過ぎぬ、といふ說、―が普通ソフィストの最も特色鮮かな說と認められる。然しながら是は明かに誤解であつて、プラトン自身の描寫に從へばカリクレスはソフィストの一人ではなく、むしろ彼等をやくざ者と蔑視した一政治家であつた事は、グロートのすでに指摘した明かな事實、今更らこと〳〵しく論ずる必要はない。今虛心平氣に、ソフィストのものとして最も確實に傳はつて居る倫理並に處生の敎を觀察する時は、吾々はむしろ其のあまりに穩健に、時としてはあまりに平凡なるに驚かざるを得ぬ。形式的卽ち修辭的に見て名言や警句や奇說と名く可きものはあるが、內容的には、道德や社會的生活の基礎を覆すやうな危險思想を見ないのみか、斬新と呼ぶに堪へるものにさへ出會はないのである。思想の歷史に於て可なりの意義を有する、かの自然 physis と人爲 nomos との對立の如きも、普通彼等特有の說と考へられて居るに拘らず、實は彼等のはじめて唱へたものでもなければ、彼等の凡ては愚か多數の口にしたものでもない。かゝる思想はすでに當時有識者の間に廣く行はれたもので、ソフィストの一人はその流行に從つて之を口にしたに過ぎないのである。彼等の努力は、むしろ主として、常識に訴へて承認され得るもの、多數が正しと認め得るもの、換言すれば、最も無難なる

穩健なる處世及倫理の教訓を、最も美しく有效に、卽ち能辯術の要求に適ふやうに說くことに向つたと解すべきである。是は眞理其ものに冷淡なる彼等の實際家的態度よりしては寧ろ當然といはねばならぬ。相對主義と常識主義とは一見相容れざるが如く見え、又純論理的に追窮したならば、常識を信じ多數の認め得る穩健なる意見に從ふといふ主義は、種々の假定や問題を宿して居る一種の獨斷論 Dogmatismus であつて相對主義の否定を意味するはいふまでもない。然しながら、理論的に凡ての判斷、思想の同等の價値乃至無價値を信ずる立場にある者も、其時々の偶然の思ひ附きや衝動に從つて手當次第に行動せざる以上は、生活の必要上、實踐的には何等かの態度又は方針を定め又取らねばならぬ。其際最も手近かのものは、外より與へられる何等かの權威に其儘に服從することである。眞理に對する信念と誠意とを有せぬ者にとつて最も自然なる安全なる道は、眞理如何の問題を提出するに及ばぬ境地に身を投ずることである。相對主義と凡ての他律主義從つて常識主義とは一見相容れぬが如く見え、しかも實は同一精神より生れた兄弟に外ならないのである。ギリシアの懷疑論者 Pyrrhon をはじめとして相對主義者が、實踐問題に移ると共に法律、習慣、傳承、神、本能等外的に與へられる權威の承認を說いたことは、後の歷史の明

白に示す所、ソフィストの取つた態度も畢竟其と同一と見るべきである。彼等が、常識に訴へて異議や批難の恐れなき無難なる穩健なる教訓を與へるを任務と考へたは、畢竟論議を超越した立場に身を置かむが爲めであつた。

今まで論じ來つた所のものは、凡てのソフィストの活動及事業の根柢に潜在する、共通の精神的傾向であるが、之を反省の立場に高め、自覺された一定の主義をして言顯はした者は、ソフィストの事業の開始者であり且つ最も偉大なる代表者であつた、プロタゴラスである。數多きソフィストのうち、哲學思想の歴史に位置を占め得るは彼ただ一人である。普通極端なる懷疑論として論ぜられる Gorgias の議論、――即ち、何ものもなし、若し何ものかありとしても認識し得られず、若し認識し得らるとしても人に傳へるを得ず、といふ有名なる議論は、すでに Windddband の鋭くも見拔いたやうに、哲學さへ自由に支配し得るといふ能辯術の威力を示さむ爲めの戯れに過ぎなかつたのである。

プロタゴラスは「人こそ萬事の標準なれ、有る事については有りといふことの、有らざる事については有らずといふことの」といふ有名なる一句に於て、相對主義を極め

て簡明に適切に言顯はした。彼はそれを、一學究として認識論の一學說、例へば、凡ての認識は感覺にもとづくがゆゑに主觀的であるといふ學說の意味に於て、述べたのではなく、實際家として青年の敎育者殊に能辯術の敎師として、しかもソフィストの事業を辯護乃至鼓吹する目的を有した一著書の卷頭にそれを揭げたのである。それは眞理の標準を人類一般にではなく個人に置き、いかなる人の表象、判斷も眞といふ點に於ては價値を等しうするを說いたものである故、凡ての人に、等しく己の意見を主張する權利を許す、實際生活より產れ出た、相對主義を言顯はしたものである。かく等しき權利を有する以上は有效に主張され、人を說得する力を有することが何よりも肝要の事となる。この事を成遂げしめるもの、卽ち弱き論を轉じて强き論となすものは能辯術に外ならぬ。

然しながら若し凡ての表象及び判斷が等しく眞であるとしたならば、何故にソフィストは己を他にすぐれたる者、他よりかしこき者となし、德を敎へ、よき市民を養成するをわが特權從つて職業となすのであるか。この問に對するプロタゴラスの答は今日其の言葉のまゝには傳はらないが、プラトンの大體に於て信ずるに足る記述に從へば、彼は等しく眞なる表象及判斷に善と惡との價値の差別を認めた。よき表象

及判斷はよき人卽ち精神的に健全なる、心の常態を保つた人の有する表象及び判斷である。しかるに人は身體に於て病むが如く、精神に於ても常態を逸する。敎育の必要はこゝに起る。醫師が藥劑に由て身體の變化を生じ人を健康に復せしめるやうに、ソフィストは言葉(logoi)によつて健全なる精神を具へたよき人を養成する。而してよき判斷卽ち常識の判斷は言葉の力によつてはじめて人を動かす力を得る故、能辯術は何よりも重要なる學科とならざるを得ない。――これがプロタゴラスの意見の大要である。

吾々は今この說の仔細に立入つて檢査する暇がない。然しこれ丈は誤謬に陷り誇張に失する恐れなくして言ひ得ようと思ふ。相對主義を始めて自覺を以て明白に主張した點に於て、又實生活を支配する主義としては極めて親密なる殆んど必然的と稱して差支なき連絡を有する相對主義と他律主義乃至常識主義とを結合した點に於て――是等二點に於てプロタゴラスは哲學思想の歷史に於て永遠に朽ちぬ功績を擧げた。しかも彼はソフィストの共通なる精神的傾向を自覺に引上げたことによつて、この位置を贏ち得たのである。

今やソクラテスに向ふべき時となつた。歸納的論法と普遍的定義との二つを彼の最も確實なる功績として擧げ、其等を學問の原理に關するものと說明したアリストテレスに從つて、彼を學問の改革者、少くも倫理學の創立者、となす說が今日最も廣く行はれる。ソクラテスは、眞の認識は事物の本質の認識であり、これは概念に於て存するを發見し、この新發見、卽ち概念的認識の原理の發見にもとづいて、概念の明確なる規定卽ち定義を得むと努力した。換言すれば認識の Idee 其ものを自覺し、それの實現を努力することによつて、彼は學問從つて哲學を全く新しき基礎の上に置いたと。是れが Zeller をはじめ多くの學者の說である。この說はソクラテスの事業の結果としてプラトン乃至アリストテレスに於て現はれた所のものと、彼自身の活動の特質及目的とを混同するものであつて、謬見たるを免れぬ。ソクラテスはいかなる學問をも、從つて倫理學をも建設しようと努力したことはなく、認識の本質について一定の意見を主張したこともなく、また其に就て明なる自覺を有した形跡をさへ示さなかつた。彼は人を選ばず何人とも談話するを好み、對手に人生の諸價値、道德の諸規範に關する問を發して答を求め、問答を巧みに操り行くことによつて、對手を自家撞着の窮地に陷れ、己の無知不明を覺らしめるを力めた。彼がこの働きを

神より與へられた使命と信じ、死に至るまで三十年を一日の如く其に身を献げ、つひに天職に殉じてたふれたことは、問ねく人の知る所である。彼のこの奇異なる活動は何の爲めであり、何を意味したか。其の目的及意義如何。

プラトンの信ずべき叙述より吾々の受ける最も深き印象はソクラテスが神より送られた國民の精神的指導者を以て自任したことである。彼はアテンの市民を精的惰眠より醒まし、彼等の努力を正しき目的に向はしめることをわが天職と信じた。金錢や名譽や其他自己に外的に附屬するもの ta heautou に心を奪はれずして、只管わが內的生活、內的本質に心を集注すること、——彼自身の語を用ゐれば「自己或は魂の面倒を見ること (epimeleisthai heautou, e. tēs psychēs) 其がよくなるやうに面倒を見ること」である。自己のよくなることは、德である故、彼はまた「德の面倒を見ること」(epimeleisthai aretēs) を彼の事業の意義と考へた。彼は、學藝の敎授さへ己の力の及ばぬ所と信じた點に於てソフィストより一段進んだ、純然たる實際家であつた。學問の改革の爲めではない市民の道德的の革新向上の爲めに、彼は生き働き又死んだのである。

而して、彼が理想とした生活、卽ち自己或は魂の完全なる修養は眞理 alētheia 及び眞理の體得である智慧或は識見 phronēsis によつてはじめて實現される、とは彼の確

信した所であつた。一定の職業に從事する者は各自必要なる技術に於て、例へば大工は家を建てる術、靴屋は靴を造る術に於て、確實なる知識を有する。明なる自覺なしには何人も技術家であり得ないのである。しかるに市民として、人らしき人として有せねばならぬ資格、卽ち德については世人は何の自覺をも有しない。彼等は人生の目的及意義について心を勞する事なくたゞ盲目的に生活する。それ故彼等に對して何よりも肝要なる一事は道德的自覺である、吾はいかにあるべきか又何をなすべきかに關する明かなる動かすべからざる確信である。眞理と識見とにもとづいてはじめて德は實現されるのである。否かゝる識見又は知識はむしろ德其ものの本質に屬すといふべきである。――是が有名なる、德は知識なりといふソクラテスの信念であつて、彼の活動の最も意味深き特徵の一である。

かくの如き、眞理の活きた確信より發する生活、卽ち德の生活は、自身以外の何ものにも依らず又かゝる外的の何ものをも求めざる、眞に獨立なる自由なる生活である。其は己のうちに據るべきものを有し何等外的權威に服從しない、從つて勿論常識にも盲從しない。其はまた實用、便宜、其他何等の制約をも許容せず、己の價値を絕對的に主張する。簡單にいへば、德の生活は自律的生活である。かくの如く何等外的の

ものに依屬せず己の價値の絶對性を信ずるが故に其は又己自らに滿足して己以外のものを求めない。凡て外的のもの、凡て單に與へられたるもの、從つて運命の勢力も其を左右し得ない。換言すれば德は卽ち福である。かくの如き道德的人格の內的自由こそ、ソクラテスの活動の最高の目的、彼自身の人格及運命の最深の意義であつた。彼は、人らしき人は生や死を眼中に置いてはならぬ、己がよき人であるか惡しき人であるかをのみ考慮すべきである、と說き、又如何なる意味に於ても、たとひ人の惡に報いるといふ意味に於ても、不正はなしてはならぬと主張し、更に進んで、よき人には生に於ても死に於ても害の加へられる事なしとまで斷言した。彼がいかにこの主義、この所信に死に至るまで忠實であつたかは周知の事實、今こと〴〵しく說く必要はないと思ふ。

今まで述べ來つた所によつて、ソクラテスとソフィストとは等しく、心の糧に飢えた時代の產兒としていかに種々の點、例へば共に學究ではなく實際家であつた點、共に市民の敎育者乃至精神的指導者を以て自任した點などに於て一致したが、しかも同時に兩者はいかに其の本質に於て精神に於て相背いたかは自ら明になつたと思ふ。

ソフィストが眞理に對する冷淡と無確信とにもとづく相對主義及他律主義の傾向を代表したに對して、ソクラテスは眞理に對する熱誠、確信と自信との生活、並にかゝる熱誠と自信とに基く人格の自律及自由を代表した。この對立は兩者の事業の精神の對立、兩者の取つた生活の傾向及態度の對立であつて、自覺された思想としての、主義の對立ではなかつた。實際家であつて決して思想家ではなかつたソクラテスは己の代表する主義を思想の形に於て明かに意識して他人の主義と對立せしめる事などはしなかつたのである。彼はソフィストの事業の淺薄を一種の冷笑を以て迎へたが、特に彼等の攻擊に力を用ゐはしなかつた。彼をソフィストの正面の敵の如く考へる普通の見解は少くも誇張を免れぬ。

ソクラテスの事業の本質及目的に關する吾々の見解によつて、彼が弟子等に與へた影響、並に希臘の文化の歷史に於ける彼の位置は最も適切に理會し得られようと思ふ。若し彼の活動の目的及眞髓が學問の改革にあり、乃至は概念の意義及價値の闡明にあつたとしたならば、彼の門下より、學問及概念的認識の否認乃至排斥にアリステッポスやアンティステネスなどの如く力を注いだ有力の弟子等の出たことはいかにも不可解といはねばならぬ。しかも彼等は等しくソクラテスに於てわが生涯を

照すべき新しき光を見、彼の死後は其の遺業の繼承乃至完成をわが天職と信じた人人である。而して此點に於てのみならず、人格の自由を主張し其自由を識見に本づけた點に於ても、彼等は相互に、並にプラトンと一致した。各極めて鮮かなる特色ある人生觀を代表し、人類の歷史に於て功績の少くない、キレナイ派とキニック派との活動がプラトンの深遠なる哲學的思索と共に、ソクラテスの人格の深き感化のもとに、彼の活動及び特に死に由て惹起された熱烈なる感激よりして、發生したことは、彼を單に學問の改革者、概念哲學の創唱者と見做しては到底理會が出來ないのである。

この事と關係せしめて吾々は希臘の文化の歷史に於けるソクラテスの位置を考察せねばならぬ。彼の働いた時代卽ち紀元前第五世紀に至るまでは希臘に於て國民の精神的指導者の位置を保つたのは詩人であつた。この位置ははじめは叙事詩人に屬し、次に抒情詩人に移り、最後は劇詩人に歸したものゝ、人生の意義を尋ね理想を揭げて國民に敎へる任務と特權とは哲學者には屬せずして詩人に屬したのである。しかるに、殆んど時を同うした、エウリピデスに於ける劇詩の自己破壞と相俟つて、ソクラテスの活動によつて哲學は今まで詩に屬し來つた位置を占領した。哲學が單なる學であるばかりでなく、同時に、人格の中心より發し全生活を支配する力、活

きた確信、生其ものといふ意義を、彼に於て又彼に由て得たことによつて、ソクラテスはこの重要なる歴史的位置を贏ち得たのである。

ソクラテスの活動及事業の根柢にはソフィストと正反對の主義が潜んで居たことはすでに前に述べた通りである。この主義を明に自覺し其を思想の形に高め、從つてプロタゴラスがソフィストの爲になしたと大體に於て同一のことをソクラテスの爲めになした者はプラトンである。彼はまた同時にソフィストとソクラテスとの對立を思想の形に移し、從つて哲學的思索の領分に引入れた。時や個性には頓着せず直ちに永遠の典型を捉へむとする彼の思想の傾向に從つて、彼は苟くも己の主義と相容れず從つてソフィストの主義と精神的類似を保つと信じた凡ての說凡ての思想を、事實上の聯絡如何には頓着せずして、悉く或はソフィストと同列に論じ或はソフィストのものとして論じた。後世の人が强者の權利を主張する極論なる個人主義や、認識を感覺に還元する認識論や、あらゆる手段殊に詭辯を用ゐて對手の意見を論難破壞するを目的とする消極的懷疑的問答法などをソフィストのものとして誤解するに至つたのはこゝに由來する。

而してこれらの事はプラトンがいかなる點いかなる方向に於てソクラテスの遺業の完成を計つたかと密に關聯する。識見、卽ち眞理の體得、にもとづく自由なる人格といふ理想、ソクラテスの人格及事業の魂をなしたこの理想は、彼の死後、其の解釋に關して、弟子等の間に分裂、反目を生ずるに至つた。プラトンは、ソクラテスが德の基礎、其の最も本質的なる要素と認めた知識或は識見を學問の意味に解し、人生の最高の價値、卽ち自由なる道德的人格の內容は學問に存するを信じ、この立場に立つて、學問卽ち眞の認識の本質及方法を闡明した。眞の認識の本質は槪念に存する、而して槪念の內容は知覺及經驗の內容と全く特質を異にする。經驗的世界に於ての「あり」は一定の時、處、見地又は關係に於ての「あり」卽ち何ものかに對しての「あり」であるが、之に反して槪念の內容は純粹なる、單純なる、永遠なる、自體に於ての「あり」である。かかる「あり」に於てこそ眞の「あり」卽ち認識、從つて實在の眞の內容は求むべきである。かくしてプラトンは、動きて定らぬ、不純なる相對的なる存在を意味する經驗的世界の上に、永遠なる、絕對的なる、等しく萬人の承認を要求する、眞理の世界を建設した。かゝる眞理を其に適應した方法卽ち問答法によつて獲得するが學問であり、かゝる學問にこそ人生の最高の價値は存する。――この信念に立脚して彼は先づ學問の

改革を企て、其新なる學問の基礎に其の精神に活かされて新なる社會、新なる道德、新なる人生が生れ出でむことを望んだ。學問の改革者であつたはソクラテスではなくしてプラトンであつた。

然しながらプラトンは彼のこの哲學、永遠なる眞理の確信にもとづいた哲學を、ソクラテスの精神を最も忠實に最も完全に傳へ且つ貫いたものと信じた。吾々は、遺憾ながら、彼のこの判斷に無條件的の同意を表はし得ないのである。彼の說いた學問は道德的人格の最高の內容、人格の全體を以てなされる深き道德的意義ある行爲であつて、單なる學究的勞作ではなかつたにせよ――從つてこの點に於てソクラテスの精神は明かに保存されたにせよ――人生の目的を學問乃至概念的認識に置くといふ人生觀はソクラテスには全然見得なかつた所で、この點は一方に於てはソクラテスの事業が一層狹隘なる範圍に限局されたを意味し、他方に於てはソクラテスの立場がすでに超越され新なる哲學的運動がすでに開始されたを意味する。其ばかりでない、吾々は更に一步を進め得ようと思ふ。眞の認識、學問的認識の本質を概念に於て認める思想さへ吾々はソクラテスに於ては見出し得ないのである。尤もプラトンをしてこの思想に向はしめた刺戟はたしかにソクラテスの活動に存した。

ソクラテスは問答の對手よりしば〳〵道德の領分に屬する諸價値の定義を要求した。道德的意識の內容は、事實上、一定の規範概念に固定して存在する故、彼はアテンの人の道德的覺醒を促さむ爲め彼等の有する諸の德の概念を檢査したのである。しかしながら最も信ずべき記錄に從へば其檢査の結果はいつも提出された定義の破毀に了り、積極的に、動かすべからざる定義に到達し得た場合は無かつたといつても過言でない。しかるに其同じソクラテスは法廷に立つて、不正の惡しきことは吾確に之を知ると斷言し、この知識、概念的學問的認識ではないこの確信に忠實ならむが爲めにつひに生命をも擲つた。若し彼の事業の目的が學問は概念的認識に存すといふ眞理の確立に存したとしたならば、彼の一生涯の活動も彼の勇敢なる最後も全然無意義であつたといふ結論は避け得られるであらうか。彼の用ゐた破壞的問答法よりして、凡ての判斷凡ての學問の可能性乃至價値をあらゆる手段を以て否定せむとする懷疑論の發生したことも、あながち偶然とはいひ得ない。德の概念の檢査より出發した彼れの態度には概念に對する興味並に尊重は勿論含まつて居る。しかしながらこの暗示に從つてこゝに眞の認識卽ち學問的認識は概念に存すといふ眞理を發見することは學問に人生の最高價値を置いたプラトンであつてはじめて

なし得た所である。概念の認識上の意義の發見、從つてこの意味に於ける學問の改革は、プラトンが、彼獨得の人生觀の立場に於て、從つてソクラテスの多數の門弟のうちたゞ彼獨り、なし得た、偉大なる天才的の事業であつて、ソクラテスの與り知らなかつた所である。

其にも拘らず、概念的認識といふ限定、其他特にプラトンのみに屬する特徴を離れて、彼の哲學の根本思想を見る時は、吾々は、其が凡ての關係や制約を超越して自體に於て永遠に妥當なる眞理、其の可能性及び價値を明かなる意識を以て唱へた點――簡單にいへば哲學的理想主義の根本思想を明かに言顯はした點――に於てソクラテスの事業の魂として原動力として潜在した主義を完全に捉らへ得たを見る。ソクラテスの活動の目的及意義をなした、眞理の動かすべからざる確信に基いた自由なる道德的人格といふ思想が理想主義の極めて鮮かなる體現であるはいふまでもない、彼に接近した人々に極めて深き印象と感激とを與へ哲學の新しき運動を呼起すに至らしめたものも眞理と確信とに對する彼の眞面目と忠實と献身、卽ち彼が理想主義に生きたことである。こゝより見ればプラトンはソクラテスの多數の弟子のうち最もよく師を解したといつても失當でない。

吾々は終りに達した。吾々は今、この講演のはじめに掲げた Eduard Meyer の言を補つて、かくいひ得ようと思ふ。ギリシア文化の歴史に於て又人類の思想の歴史に於てソクラテスの占める双びなき位置は、終極は彼の理想主義に基くと。尤もこの主義を、自覺された思想の形に高めたのは彼の高弟プラトンである。世界に於ける哲學的理想主義の創唱者たるこの千古の大思想家を通じてソクラテスの歴史的位置は永遠に確保されたといふべきである。ソフィストとソクラス、プロタゴラスとプラトン、――是等二對の名稱は相對主義と理想主義――或は生活の態度として或は思想の傾向として相對し相競ひつゝ、人類の精神的生活を動かし支配する是等二大主義の代表者として象徴として永遠に意義を失はぬであらう。